

民間相談機関における臨床技術について

— 就園前障害児の指導技術を通して —

その9 図式的投影法による親のカウンセリング過程

家庭生活研究会 村瀬 和子
古門 睦子
宮崎 徳子
水島 恵一 (文教大学)

序 説

56年度報告以来、我々は図式的投影法を障害児臨床に用いる試みを報告してきた。図式的投影法は、行動科学的アプローチと現象学的アプローチの統合として単純かつ明確な図式を操作的に用いて、その骨組みの上に現象的世界を結実させることを目指して考案したものである。そして、これは操作的心理測定、構造的人格診断、その他の認知世界の理解、および心理治療的洞察過程の促進を同時に可能にする。

56・57年度では治療者及び母親による心理測定的な面を報告し、57年度ではさらに図式的投影法による母親の認知変化をも報告した。

図式的投影法における図式は理論図式と体験図式とに大別される。理論図式は、要素の選択及びその構造的関連のさせ方が一義的に操作的に決められているものであり、その典型は58年度のケース研究法において示した。

一方、体験図式は投影法テストとしての意味をもつが、操作が簡単で実感を確かめながら体験に則して作品を作り変えることができるので、その過程自身がイメージ・芸術療法的意味をもつものである。

今回は、前年度に引き続き理論図式を用いて図式的ケース研究法を報告する予定であったが、体験図式を障害児臨床に用いる面がきわめて重要であるにもかかわらず57年度報告に（母親の認知変化について）ごく簡単な例示をしたのみなので、体験図式研究の報告を優先させることが適当と思われた。したがって今回は障害児の母親のカウンセリング過程の中で母子関係の表現、洞察のために図式的投影法を本格的に用いた結果を報告する。

目 的

この研究では、投影図がいかに母親の内的表現となっているかを自己像単純図式の枠、駒、核の変化からみていくこと、また逆に図式投影によって母親の洞察が深まっていく過程をみていくこと、総じて全体の過程の中で図式的投影法が果たした意味を検討していくこと、を目的としている。

方 法

自己像単純図式投影法は、基本的には通常、B5版の白紙、30 cmの針金、1円玉大の円形駒を用いて、白紙上方2 cmの所に「外界」のカードを置き、駒を自己の「核」、針金を自己の「枠」として、核の位置、枠の位置とその開き具合によって外界に対する自己の姿を作成するものである。規定作品は枠はなめらかな円形とするが、自由作品は、「なめらかな円形」という規定を除くことによって自由な自己像作品を作り、体験を吟味したり、あるいは対象を故意に近づけたり、駒を上下させてみて自己像の変化をみることが出来る。また対象を「外界」以外のものに自由に変えて自己像を吟味することができる。

ここでは、子供に対する母親の自己像をみるため、子供を対象カードとした。（ただし、対象がキーパーソンであるため、図式投影のならわしに従って四角カードでなく子供の名を記した円形駒を用いた。）

今回対象としたグループは、言葉の遅れを主訴として当センターに来所し、センター側がグループ構成した母親3人（子供4人。双子の兄弟が一組いるため）で成り

立っている。週2日、月曜日と水曜日に来所し、子供とは別室で母親グループとしてカウンセリングを行った。

なお、このグループは、昭和59年4月に成立したものであり、この時点で第1回目の図式投影に導入している。以後、昭和59年7月までの4ヶ月間隔週水曜日に図式投影を導入。ただし都合により行えなかった場合もあるので計8回となっている。またグループ自体は8月以降も継続しており、フォローアップとして、その後11月と2月にさらに2回導入している。

以下3人のメンバー（子供は4人）のグループカウンセリング過程のうち1メンバーの過程を詳しく述べ、ついで他の1メンバーを略述する。第3のメンバー（兄弟の母親）の結果については複雑になるので省略し、最後にグループ全体の要約の中に記すにとどめる。

結果1 ある母親の図式投影過程

子供（以下Aと略記する）は、昭和59年4月の時点で2歳8ヶ月で、言葉の遅れを主訴として当センターに来所している。家族構成は、母親とAの2人。Aの父親は（Aが1歳11ヶ月のとき）事故死。

以下、図式投影を導入したセッション8回およびフォローアップの2回について作成時の母親の言葉を引用し、カウンセリングの中での話の概略と簡単な注釈をつけ加える。（以下母親をMと略記する。）

第1回（図1 59.4/4）：「子供が私から離れないみたい。常に私の傍にいる。この子は素直になりすぎて反抗しない。」とMは作成時言う。作成後、カウンセリングの中で、いとこ7人と遊び、その時のAの様子をみて、「自分のベースの中にいる」とAのことをいう。またAがMに甘えてくる、という感じがなく自分で物事をやりたがり、「私の干渉をいやがる」とも述べている。しかし、デパートに連れていった時は、「私にぴったりくっついていた」といい、「この時の行動は予想外のものであったので、びっくりしたが帰ってからほめた」と述べている。

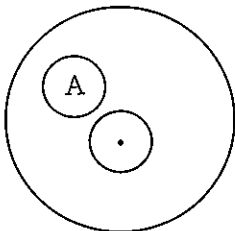


図1

図式投影時には、子供が自分から離れないことの方を問題にし、それに改めて気付かされて、ショックを受けたとみられるのだが、カウンセリングの中ではMは、甘

えてくることの方をPositiveに語っており、そこに子供を自己の枠内に入れておきたがるような面がアンビバレントに存在していたのではないかと察せられる。したがって図もアンビバレントな両側面から見た方がよいかもしれない。

第2回（図2 4/11）：「今日はプレイ室でさっさと離れた。子供は離れていくが、私がどっしり後にいるのではなく、ついていく、という感じ。」と作成時Mは語る。

やはり、子供が離れていくことに対してプラスの評価を与え、またそれに対する自分のあり方にも洞察を働かせてきたようであった。

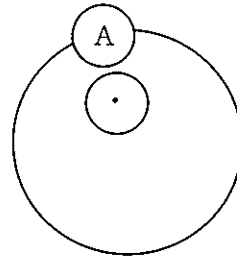


図2

第3回（図3 4/18）：「Aは枠から出かかっているのに何をすかわからないので私が追いかけている。」と、Mは作成時語る。そしてAが怒られるような事をしなくなり、いろいろとわかってきたためMも怒らなくなり、楽になった、とカウンセリング中に話す。

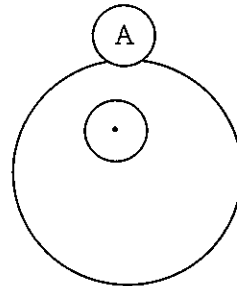


図3

第4回（図4 5/2）：「いつも私が電話で話をしていると、傍にくっついてたのだが、昨日はこなかった。いとこ（4歳）と遊んでいて私の傍にこなかった。少し私から離れていった感じでうれしかった。でも何か心配で私は追っかけている。」と作成時Mは語る。カウンセリングの中でいとこが来てAがとても嬉しそうな表情をして遊んでいたこと、いとこの仲間に入れてもらえたのか入れるようになったのかはわからないがよく遊んだことを嬉しそうに話している。

前回に引き続き、Aが独立し始め、それをプラスに評

働しつつも、なお不安でMが追うという第1回めのアンビバレンスがやはり尾をひいているようであった。この回でM側のこのアンビバレンスを図式投影させるためには、第7回以降に示すような向きを伴った作品化が必要だと感じられた。

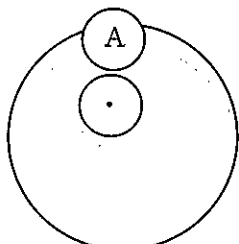


図4

第5回(図5 5/16):「全然とじちゃった、あけられないの。公園でよその子を見て大ショック。」と作成時Mは語る。作成後カウンセリングの中で、公園でAが他児のおもちゃがほしくてひっくり返って泣き、他児にいじめられ、家に帰ってきてしまったことを述べる。家に帰ってからAをきつく叱ったためか、「私から離れなくなって、プレイルームに入る時も泣いて離れるのをイヤがった。だから私も心配で離し難くなってしまった。」という。その後「公園には、もう行くのよそうかしら。」「みんなの噂になっていると思うし……。」ともいう。

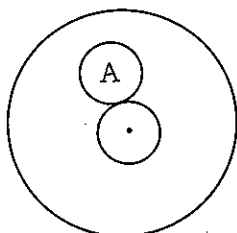


図5

公園での出来事がMとしては、よほどショックだったのであろう。第1回目と同じようにMは枠をとりAについている。現実場面でもMは不安でAを外に出さず、そのためかAの方もべったりMにくっついてしまっているようであった。実は公園での出来事以前から(前回以降)Aは、ひっくり返って、よく泣くようになっていたようである。(理由がはっきりしないのに泣いたりする時も度々あった。)前回のプレイ場面(集団遊戯治療場面)でも、ひっくり返って泣くことがみられている。

なお、この時の図に関して約1ヶ月後(6/7)に、さらに詳しい説明を求めたところ、次のような感想が得られた。すなわち第4回目(図4)では、Aが枠から出ていた。その頃は生き生きしていたような気がするのに、

第5回目(図5)では(枠をあける気はあったのだが)何か危かしくて、あけられなかった、ということである。「外に出ても他人のものをすぐほしがって、手に入るまで泣いてぐずっている。相手の子にも、いやな思いをさせるので、公園へ行くのがこわい。だから家の中に入れている。本人も外へ出ていかないし……。だから私の方へ向いてしまっている。枠から出てくれば良い、と思うけど……。その時は出せなかった。泣くし……。」とMは述べていた。

第6回(図6 6/20):この回は、カウンセリングの前後、2回、図式投影を行い、その変化をみている。(図6-1, 図6-2)「前よりは良くなったが、やっぱり出ていかない。向きが私の方に向いているかな……」と図6-1作成時Mは言う。眠る前Aが本を読むことを要求してくるが、そのAの行動がMにとってはうとうしくなり、あきてしまう。しかし遊んでくれる子が近くにいないのであきるが、相手をしているという。他のメンバーが3年保育に入れたらどうか……と提案すると、「Aは何にもわかっていないし、外へ出ないし……」と逃げ腰。しかし、やっぱり遊んでくれる相手;それもAの自由を尊重してくれる人が必要だという。「私は、遊んであげな

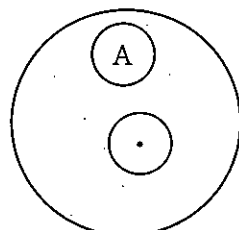


図6-1

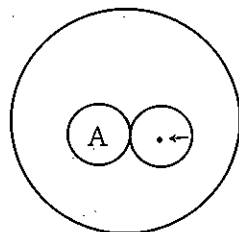


図6-2

くてすむなら、すませたい。根が子どもが嫌いだから、めんどくさい、私もわがまま、2人共わがままなのか……。」「子供の気持ちになって遊べない。」と、自分のことをいう。また「Aが怖がる事をしてAの反応を面白がったりもしている」「他の子をみてもかわいと思わないで、自分の子の行動とを比べる対象としてみしてしまう」等々とも述べる。「子供がもし、いなかったら」とのカウ

ンセラーの質問には、「同じ気持ちみたい。頼り頼られ。私も幼稚なのかしら、常に向き合って並んでいる状態かな。」という。*あなたの友人で子供に「出ていけ!!」と喋る親がいる、という話が出ましたが、その友人のように「出ていけ!!」とは言えないのかな? のカウンセラーの質問に、「私をおいていかないと私がすがっている感じ。しっかりしていなくてもいい。変り者でなく。ごく普通で、親子仲良くやっていたらと思う。」と語る。

以上が図6-1を注視しながらのカウンセリングの要旨であるが、その後図6-2を作成した。

図6-2について、「向き合っている感じ、ちょっと間があいている。そうだと頼り合っているのかな。」と作成時話す。「3歳位でとまっていたほしい。」といい「あ、やっぱり私が頼っているのだわ」という。

図の変化をみると枠はほぼ閉じたまま、Aの駒の位置が図6-1よりも、はるかに近寄り、Mの核の左横に来ている。Mは向き合っている感じ、と同時に、自分自身がAに頼っていることを再度の確認をしたようであった。この図6-2で、図6-1の時のAの駒を単に下におろして近寄せるだけでなく、横に並べた、ということは、M自身も自己中心的で子供と対等に感じてしまうことを意味していたようである。図式を注視しながらのカウンセリングによって洞察が深まり、それに伴って図式もはっきり変化したとよいであろう。

第7回(図7 6/27):この日は、図式作成前に図式表現への抵抗を尋ねたところ、「いやじゃない、変わっていくので面白いな、と思った」と述べている。また枠の意味については、「心よね、家庭かな……、心よ。」と述べている。

この回は、現実図と理想図を作ってもらった。また4回目では指摘したように、Mのアンビバレンスを図式投影させるために向きを伴った作品化が必要だと感じられたので矢印を記入してもらった。

現実図(図7-1)を作成の後、「向き合って、くっついている。出て行って良いわよ、とあけてあるんだけど。今、私落ちついている。親が落ちついていると子供の方もおちつくみたい。今でもよく泣く事は泣くが、また、ケロッとする。」と語る。実際の図の枠のひらきは、前回(図6)と、それほど違っていないが、そのわずかなひらきの違いが、Mには重要だったようである。

M自身が安定してきた様子がカウンセラーにも感じられた。

次に理想図(図7-2)を作成してもらったところ、「出てほしいけれど、Aが向こうばかりみても寂しい。こ

っちを向いて欲しい。」とMは語る。

ここでは、Aの独立をPositiveに考えながら、こっちを向いてほしい、という両側面がみられている。枠のひらきは当然であろう。

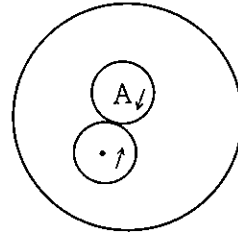


図7-1

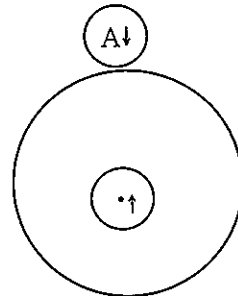


図7-2

第8回(図8 7/23):「Aがかなり出ていったような気がする。でも、いつまた私の方に向いてくるか、わからないし。でも前に比べて、余りくっついていなくなった。スーパーでも道でも家でもベターッとしていない。でも、どこかへ行っちゃうような気がして不安。」と、作成時Mは語る。以後のカウンセリングについては特に図式については触れずに夏休み前のこの最後のセッションを終了した。

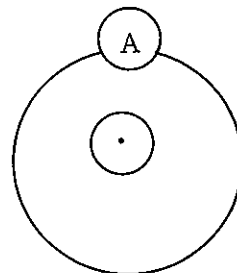


図8

以上が本研究で対象とした4ヶ月のカウンセリングにおける8回の図式投影セッションであるが、母子集団治療はその後も継続しているの、その間にフォローアップ的に行った2回の図式投影結果について略述する。

第9回(図9 11/12)：夏休みから秋のセッションを経てAがかなりMから独立していった様だった。「大分、外に出ていると思うが、向きは私の方だわ。私はAがまだ何をするとオドオドしている。他人からみてもオドオドしていると思うのではないかしら。」と、作成時Mは語る。

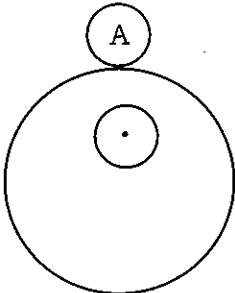


図9

カウンセリングの中でAが公園で3歳の男の子と一緒に遊べたことを嬉しそうに話していた。

第10回(図10 2/4)：秋から冬にかけては、子供の状態としては、ある程度独立しながら、しかし外に出る機会が少なく家の中で母子で過ごすことが多かったようである。「外に全然向かない。位置は前と同じ位かな。」と作成時Mは語る。

カウンセリングの中で、近頃、他児と比べなくなった事、2人で家の中で好き勝手なことをして、ぬくぬくと過している事、しかしM自身イライラしなくなったことを話していた。

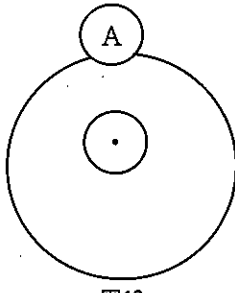


図10

なお、このころには、他の母親も含め、母親グループ全体の話題が子供に対することよりも親自身の問題に、かなりウエイトを移してきたことを付記しておきたい。

結果1 ケースAのまとめと考察

以上図1～図8をシリーズとして、図式による治療過程をまとめたい。図1～8のうち、図2～4は時期的にも、また形の上からも大差がないので一括して扱うこととする。

図1では、MはAが自分から離れないことをnegativeに語り、自分の枠をとじ、その中にAを入れ、近づけている。しかし後のカウンセリングの中でAが自分に頼っていることをpositiveに語っており、ここにMは自分とAとの間の独立と依存の関係のアンビバレンスに直面している、といえる。また初めての図式化によってMは、自分とAとの関係を改めて考え直しているが、そのアンビバレンスがM自身の気持ちの不安定さを生じさせていた、と考えられる。

図2, 3, 4は一括して、AがMから離れていく事を事実として受けとめ、Mとしても少なくともPositiveな評価を与えようとした時期のものだとみなせる。そこで改めてMは、図1よりも自分のAに対するアンビバレンスに関する洞察を深めている。すなわち図1よりもAの独立を強くPositiveに考えて喜んではいる。しかし図でMの核が枠の上の方に上ってきていて、Aの駒を追っておりMの側の分離不安もより明白になってきている。しかし全体として、AがMから離れて独立していることを受けとめたため、図式の上で自分の枠をあけて、Aを出そうとしているものと考えられる。

しかし図5の頃、公園での出来事がありMの不安は大きくなる。AもMから離れなくなり、そのため図2, 3, 4で出かかったAをまた枠の中に閉じてこめてしまう。駒同士も近寄り、しかもAの駒がMの核の方を向き、2人だけで世界を作って寄り添って生きている、という感じを与えている。図5のような表現が一般に共生的関係をあらわすことは、他の多くの事例研究からも裏づけられていることである。

図6の頃は、もうぐずりや泣きが少なくなっているが、図5に比べ、Mの核とAの駒が少し離れた程度の違いである。MはAが出ていかない、離れてくれないことを強調して、Aの存在をうとうしいと述べている。しかし次第に、カウンセラーとのやりとりの中でAの存在を良いものと思え、MとAの関係が頼り頼られて並び合っているものであることに気付く。最後にはM自身がAにすがっている、というように洞察を進めている。以上のカウンセリングの後の図6-2では、図6-1よりもはるかに駒同士が近寄り、自分の方がAに頼っているのだ、と洞察した。図を注視しながら内的体験を深め、それに伴って図も変化していく、という心理療法的プロセスが見られた、といってよいであろう。

図7では、現実図の方で図5以上に駒が近寄り、向き合ってくっついていく。しかし枠はひらき、Mの分離への準備と安定感が感じられる。また、理想図ではAの分離を欲しながら、しかしAにこっちを向いてほしい、という両側面がみられている。図6でMが深い洞察に至り、一段階ついた、という事と、矢印を伴った図式化によってAとのアンビバレントは関係にM自身整理がついた、という事が考えられる。

最後の図8は、図7から約1ヶ月経ってから作成されたものであるが、図7-2の理想図にかなり近づいている。枠からAを出した図2・4と似ているが、内容的には、かなり変化し、全体としてより安定した母子関係がみられている。

なお秋から冬にかけてのフォローアップセッションにおいては、図はほぼ同じで、枠からAが外に出ている。それは実際にAがMから独立してきたことのあらわれでもあるが、同時にMの安定により、距離を保つことができるようになってきたためだと解される。AがMの方に向いているのは、まだMの不安定が残っているためだと表明されているが、しかしそれは、子供の自然な現実を反映しているのかもしれない。後にグループ全体について述べるように、親子関係の吟味としての1つのヤマは、すでに第6～8回めで越えられ、親子関係自体も1つの安定期に入っていったものだと解釈できるであろう。

以上、全体を通じてMの気持ち(内的な体験)が、より明確に、M自身にもわかるように図式上にあらわれてきている、とみられる。そしてMがその図式をみて、さらに洞察を深めていく、という結果があらわれている、とみられる。特に図6の前後変化でみられるように、図式を注視しながらMの内的体験を深め、それによって図式も変化している、という心理療法的プロセスが見られたことは、体験図式のイメージ、芸術療法的意味を、Mのカウンセリングにおいて再確認したものだといえよう。ただし図式の変化は、図8と図2-4の類似性にもみられるように一義的に定まるものではない。図式だけで一義的な解釈ができるとは限らず、むしろ前後の脈絡やカウンセリングとの関係で図式の意味も了解していくべきだということは、我々の他の臨床経験からも示されているところである。

結果2 ケースBの要約と考察

別のケースBについてはケースAと同様の詳しい検討を行ったが、ここでは母親の認知の要約と考察のみを記す。図11-1から10までがその略図である。その図の番号は作図日時で前述したケースAに合わせている。(第6回目に相当する6/20のセッションに参加していないの

で図11-6は欠となっている。)

図11-1:「私の眼をじーと見るようになった。Bの気持ちはどうか分らないが、私としては重なっている感じがする。でも枠の奥の方ではないですね。」と作成時Mは語る。

図11-2:「私についてくる感じ」と作成時Mは語る。はじめ枠の外にBの駒を置いてみて離れたかなあというが、やはり中に入れる。この頃Bは気嫌が良く外に出たがるのでMはつれて出ている。

図11-3:図式投影をやるのが気が重いという。「Bと重なっている。私が上にのっかっている。Bは重なるのがいやかもしれないけど私が内へ内へと入れている。上の子供が学校や幼稚園でいなく2人だけなので、やきもちの心配がないので私がひっつけているとBも喜んでひっついてくる。今までは親子関係が大切だからしなくてはいけない、と思っていたけど、今週は楽しんでやっている。もう図に入れればそんなに長くはできないし……。私がひっつけている。私がのっかっている。」と洞察を述べる。しかし一方「余裕ができて抱いている。」とも述べている。

以上、図11-1～2では、子供の方がMに近づいてくる感じであり、BがMに重なっていたが、図11-3に至り、M自身がBをMの方へひきつけ、Bの上に重っている、というように変化している。M自身それを楽しんでいるようにもみられたが、この図式を行う事に対して「気が重い」と述べていたことに注意を要する。このアンビバレンスはケースAとも共通しているが一方、自分の方がBを離せないということの洞察はAに先立ってすでにあらわれ始めていた、と思われる。

図11-4:「気分的に少し枠をあけてBを出そうかと思う。ちょっと離そうか。でも離れられない。Bのこと分っているかと思うと分っていないから出せない。」と作成時Mは語る。Mは子供を信じて自由にさせたい気持ちはあるが、何をするか予測がつかない子でもあり、少し離れるゆとりはあるが、まだ離せない、という不安を持っていて、そのような現状を受け容れざるを得ないのである。

図11-5:「Bに対して少し余裕が出きたせいか、子供と離れて何かをやっている人を羨しく思うようになった。私も子供の世話以外の何か、他の事をしたいな、と思うようになった。それで駒同士の間を少しあけた。」とMは作成時言う。この回は現実の図式というよりも、Mの理想が投影されていたようで、それは次の回の理想図ではっきりすることになる。

図11-7:この回、図式作成前に図式表現への抵抗を

尋ねたところ、抵抗を語り、「自分を見るのがいやだ。自分をいやな性格だと思っている。考えたくない。自分の中でモヤモヤしているものは出してない。」という。図式作成後、カウンセラーの質問に対して「私が上によって楽しんでいるところ。今の重なりはいやでない。これから離れるだろうという期待をもっているの、今しばらくの感じで楽しんでいる。重なりはいやではない。どちらかというと離れている時は、しっかりしていなかったようだ。」とMは語る。図11-3の重なりに比べ、図式的には変化はないが、M自身の気持ちはpositiveになっているようであった。

そしてこの回に行なった理想図ではBを枠から出して、自分自身を独立に保ち、ゆとりをもって、他の関心事にもひらかれたい、ということが示された。

図11-8：「重ならなくなったが、接点はある。まだBは出ない。入口はこれでもひろがったつもり。」と、作成時語る。図の上では枠の開きは、4回目以降、ほとんど変化はしていない。

図11-9：その後、約4ヶ月後のフォローアップでは

じめて、(理想図的な図11-5を除いて)親子の駒が離れた。しかし「枠の外には出せないですね」とMは作成時語っていた。

図11-10：「入口はあいているけどまだまだ出さない。出すのが怖い。学校へ行けば出すかな。親としてダメですね。口では強がり言っているけど、実際はダメですね。」と作成時Mは語る。カウンセリングの中でBにとってもMにとっても楽しいことがあった、と語る。枠の開き具合も、核の位置も、前回と同じであるが、Bの向きが逆になっている。Bを外に出したい、という気持ちのあらわれだったようであるが、さらに詳しい気持ちの変化はMにもつかみきれていないようである。なお子供のことについて、あきらめが表明されて、いくらかゆとりができていた事が、カウンセリング全体から推察されている。

以上ケースBの全体の流れは、子供との密着が意識にのぼり、特に母親の駒の方が上になることに関して自分の気持ちの現実に直面し、それを肯定する一方、図式投影自身が苦しくなる、というアンビバレンスを示したものと解釈できる。図11-5以降、母子が離れることを意

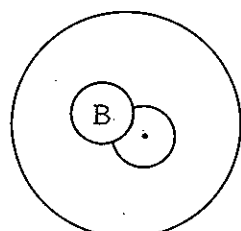


図1

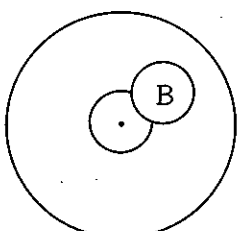


図2

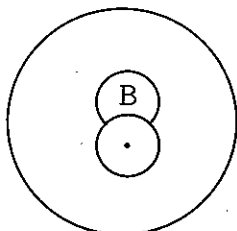


図3

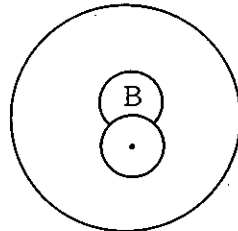


図4

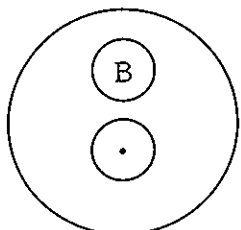


図5

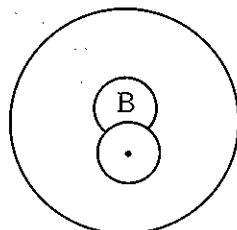
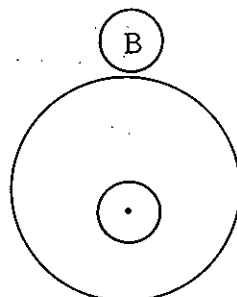


図7



理想図

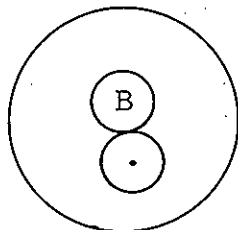


図8

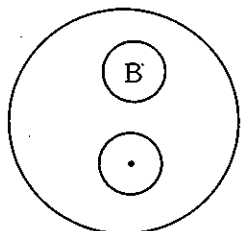


図9

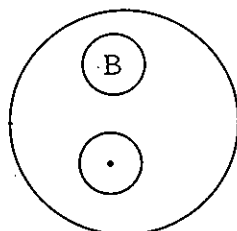


図10

識し、現実には（特に母親自身の気持ちにゆとりが生じたためか）若干、母子分離の方向に動いていったものと解される。ただケースAの場合ほど図式投影そのものが治療的にダイナミックに作用したとはいきれないようである。

結果3 グループ全体の要約と考察

ケースA・B以外の1メンバー（兄弟の母親C）の動きも含め、3人の母親全体の過程は次のように要約できる。

はじめのうちは各メンバーとも子供の状態、症状がよくつかめず、子供に対する疑問や当感が強かった。それを反映して図式においても子供と重ならんばかりの関係であり「外へ出したい」といいながらも出せず、不安を抱えながら外に対して開くゆとりのもてない状態だったようである。そしてその状態を受け入れているのではなく「蒸発したい」など子供との距離の近さを重く、苦しんでいる様子であった。

すなわちAにおいてもBにおいても一面では密着を、positiveに受けとめながらもやはり、それを改めて問題と感じ、特に自分の方から子供をかかえこんでしまっていることの洞察が発展している。一方ここに述べなかったもう1人のメンバーCにおいては、通所指導によって大きく希望をもつようになりながらも、子供および母子関係の現実に直面しきれなかったようである。兄と弟に対して特に差はなく、またAやBのように母子が重なることもなく、それだけに問題の焦点が定まらなかった感もある。

8回の図式投影セッションを含め4ヶ月のグループカウンセリングを経て、特にAとBにおいては図式を媒介にして母子関係の洞察が深まり、それが図式の変化にも若干あらわれるという図式投影的心理治療過程が進行したとみられるが、ケースCにおいてはその影響ははつき

りしない。またケースA、B、Cそれぞれがどのように影響し合ったかも十分に明確化できなかった。しかし、4ヶ月を経てフォローアップ時には、各メンバーとも子供の状態が大体つかめたためか、安定して図式を作成できるようになったようであった。子供と母親の間に適切な距離もでき、また子供の状態で「何をするか分からないので離せない」（ケースB）といいながらもその距離の近さから逃れようとするのではなく、「今はこの位近くにおいてやらなければ危いから」（ケースB）、と主体的に距離を決めている感じがうかがわれた。3人とも針金の入口を開けて「自由にやりなさい」といったニュアンスで子供の活動を応援する気持ちも表明している。

話題も3人とも一応は、子供のそれぞれの問題点に個別に焦点づけができるようになり、そういう状態の子供に対して自分がどうあるか、どう生きていくか、という母親自身の問題も深められていったものである。

最後に図式的投影法導入のカウンセリングの効果に関していえば図式作成に対して抵抗もあったが、それは事態に直面する真剣さと表裏をなしていたと思われる。すなわちあらわにするには余りに重い現実に目を据えることになり、それだけに通常の面接より深い所に触れたようである。このような過程を通じて洞察と現実受容が増し（子供のプラスの変化もあるが）母親の認知の変化がその都度図式及びカウンセリングに表現されていくという効果が一応は認められたといっても良いであろう。ただし母親自身の問題その他問題が中核になるのに従って、ここでとりあげられたような単純図式への関心は弱まっていったようであり、この点問題意識の変化に応じて図式投影の方法も柔軟に工夫していかなければならないようである。この点についてはすでにいくつかの試みがなされているが、別の機会に報告したい。